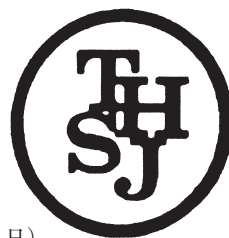


日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第69号 (2011年4月1日)

発行者 〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
日本女子大学百年館高層棟9階917研究室内 日本ハーディ協会
編集者 〒586-0043 大阪府河内長野市清見台3-9-19 渡 千鶴子



MAIDEN CASTLE : ドーチェスターの南西にある先史時代の要塞跡 (提供: C.W.)

最後のスタンザ

福 岡 忠 雄

未だ姿を見せぬ心臓よ、そっと鼓動を止めろ
生まれるときがやってきても
そのまま長き眠りを続けよ。
運命という裁き手たちが、われわれにまき散らすのは
ただただ艱難辛苦だけ、
死の影のために、我らの陽気な歌もおびえへと転調する。

よく聞くがいい、ひしめく群衆の嘆きの声を
笑い声は消え、呼び交わす言葉も空しい。
希望はしほみ、祈りも届かず、
愛情も 熱意もすっかり冷え込んでしまった。
たとえお前が生まれ来ても、どうすることも出来まいに。

ハーディの詩 *To an Unborn Pauper Child* の冒頭の二連である。生まれる前の胎児に向かって、この世に生まれてくるのではない、この世はただただ苦しく悲しいことばかりだからと呼びかけているのである。いかにもハーディらしい詩である。ただし、ここでいう「ハーディらしい」とは、「世に誤解されて流布されているハーディ」の謂いである。人生の悲惨、生きることの苦しさをこれでもかこれでもかと突きつけてくる度し難いペシミストとみなされている「ハーディ」のことである。十五年ほど前に著書を上梓、先輩・友人にお送りした中で、「せっかくですが、私はハーディが嫌いなので」との「礼状」があったことを思い出す。しかし、そのようなハーディ像は彼の一面に過ぎない。その証拠に、一見したところまったく救いのないようなこの詩の結びのスタンザを見てみればいい。

だが、生まれ来て、生きよ。われわれは所詮、
非論理的で、楽観的で、夢ばかり追う生き物だから、
つい希望を持ってしまう。お前が、健康と愛と友人とに
ふんだんに恵まれますようにと。つい夢見てしまう、お前が、
これまで人間が得たことがないほどの喜びを見出すようにと。

先行するスタンザはすべてこの最後のスタンザのため、「それでもやはり生まれてこい」と言うためのものだったのである。これでもハーディは「度し難いペシミスト」だろうか。ハーディを頭っから嫌う人たちは、この詩の場合のように、先行する部分だけ読んで拒否感を持ってしまい、ハーディの全体像の中の最後の「スタンザ」を読み落としてしまった人ではないであろうか。ペシミストなどという乱暴なレッテルよりも、詩の中でいう *unreasoning, sanguine, visionary* のほうが、よほどハーディの本質を衝いている言葉のようにわたしには思えるのだが。

この詩を読むときいつも思い出すのは、トマス自身が生まれたときの事情である。というのも、彼自身が危うく“unborn child”になりかけたからである。『トマス・ハーディ伝』にはこうある。

月ぎめの看護師として来てくれていた有能な女性の機転がなければ、[彼は]この世に生まれてなかったかもしれない。というのも、彼が生まれたとき、危うく死産として捨てられそうになったのを、救ってくれたのは彼女だったからである。「死んでるですって。ちょっと待ってちょうだい。生きてるわよ。まちがいはなく」
(Florence E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy, 1840-1928*, Macmillan, p. 14)

こうして、紙一重の差でこの世に生まれ出た赤ん坊がこの後八十七年間生き続けることになったのである。まさに *Satires of Circumstance* と言うしかない。「紙一重」といえば、ハーディの生涯のもう一つの重大事件、エマとの結婚自体がまさに紙一重であった。St. Juliotの教会修復に向いた彼はそこでエマとの運命的出会いを迎え、二人の仲は急速に深まる。やがて、仕事を終えた彼が帰る日が来て、

その時でもまだ愛の^{はかり}天秤は
一片の羽毛にも揺らぐほどに、定かならぬものだった。

——だが、並んで戻ったその時には
すでに君の片頬には朱がさしていた。(At the Word 'Farewell')

かくして「一片の羽毛」の差の傾きで、二人の四十年になんなんとする結婚生活、「幸せは初めの二年間だけ、あとは砂をかむような日々」と彼自身が述懐する不信と角逐にまみれた関係が始まったのである。しかし、この場合も「最後のスタンザ」がある。1912年11月エマが逝去。その直後から、彼は悔恨と追慕の詩を書き続け、追憶の中で、二人の愛を取り戻し、失われた日々を回復しようとしたのである。こうして、愛を詠った数多くのイギリスの詩の中でも特に傑出しているといわれる*Poems of 1912-13*が生まれた。なるほど、ハーディの小説では、一瞬の事故が重大な悲劇の結果を招く経緯は少なくない。しかし、それらのいくつかは最後には、ある種の充足と静謐に包まれることもまた事実である。追っ手が迫っていることを知りながら、ストーンヘンジの石の上で眠るテスの寝息、すべてを失い落魄の身となったヘンチャードが遺書に託した潔さと不敗の精神、それら「最後のスタンザ」のundertoneを聞き逃してはならないと思う。

運営委員を退任して

森 松 健 介

玉井暉氏が会長を引き受けてくださって2期目となり、台風襲来の昨年度大会にも驚くほど多数の参会者があった。この日私は、運営委員を辞任した(体調不良)。最近は《名ばかり役員》だった私も、故吉川道夫氏が総務幹事であった12年間、庶務幹事と会計幹事を兼務、吉川氏が会長をなさった4年間は総務幹事だった。その間お力添え下さった皆様(特に私の後任会計幹事川本利孝氏。氏の任期は私の総務退任後も相当続いた)に心からお礼を申し上げる。

この日には、大幅な役員人事の刷新も行われた。新たな事務局長坂田薫子氏、会計幹事の木梨由利氏、庶務委員長の並木幸充氏と「会報」「ニュース」の各編集長新妻昭彦氏・渡千鶴子氏を初めとする新執行部の方々には、私も1会員としてこれから永年大変お世話になる。よくぞお引き受け下さったと頭が下がる。

また同時に、今回退任された役員の方々には熱い感謝の意を表したい。とりわけ20年近く事務局長、庶務幹事をなさった永松京子氏、小林千春氏、約15年間会計幹事を務められた船水直子氏のご尽力は大きなものであった(会計事務や雑事は毎週生じる)。この方々のご苦勞のほんの1例として述べれば、『ハーディ全貌』の編集に際して事務局長は、原稿が間をおいて送られてくる度に丁寧に大型封筒に2重梱包し、5人の編集委員に個別に速達された。しかも編集委員の名を冠されていないのに、編集会議に出席を要請された(つまり、お名前が紙面に出不い実質上の編集委員。ついでに明かせば、玉井編集委員[現会長]はその都度、旅費自前で上京された)。諸氏は不平を漏らされたことがない。英文学縮小の今日、当会が隆盛している原動力だ。

隆盛と言えば、大阪教育図書社の『トマス・ハーディ全集』は着々と刊行が進んで

いる。昨年の大会には同社の社長様みずからが、寒そうな廊下に出店を張っておられた。午後遅く「売れますか？」と私は単刀直入に伺ってみた。「これからですわ」がお答であった。同社発行の『ギヤスケル全集』の時は、ギヤスケル協会の会員で全巻購入された方が多かったと聞いている。ハーディ協会にはその雰囲気がないのではないのか？ 値付けが高すぎるという声も聞いたが、文学書が売れるご時世ではないのだから、発行部数を抑えざるを得ない。すると単価が高くなるのは小学生の算数問題である。儲からない企画を刊行/敢行し続ける同社には、当然敬意を表したいものだ。私はこの全集中、『詩集2』（全訳）、『詩集1』（第四詩集）の新訳にかかわったので言い出しにくいのだが、私たちは少なくとも、所属大学の研究費担当部署、研究室や図書館に全巻購入を申請すべきではないだろうか？

もう一つ《隆盛》について。昨秋、日本英文学会会長丹治愛氏が、同学会関東支部大会当日、「ハーディ復活ですよ」と私に声をかけられた。大学院でハーディが人気を得ているという。また本紙に長田舞氏が書かれたように、英国の院生にもハーディは大人気だそうだ。

さて私は役員を辞めたが、英文学に興味を失ったのではない。この1年に、紀要論文（400字詰めで60枚X2点）や上記2点の訳著（ハーディ詩・計703編の徹底的改訳）を執筆、ブレイクの『ミルトン』論（110枚）を共著に収録、ミルトン協会のシンポジウムを担当、年末には『近世イギリス文学と《自然》：シェイクスピアからブレイクまで』（1450枚）を中央大学出版部から上梓した。3月にもう1冊の共著（65枚）が出るし、3月末までに書評1つとハーディについて紀要論文を書き、4月末にも「テニスンとハーディ」を書く。皆様に、これからもよろしくとお願い申し上げる^{ゆえん}所以である。

ハーディと私 その後

北脇徳子

ハーディ小説の登場人物たちは、「偶然」の出来事に運命を左右される。偶然のために、彼らは転落の人生を辿るのであるが、私の場合は、幸運なことに、ハーディとの偶然の出会いによって、新たな生きる手立てを得たのである。結婚こそ人生の目標だと、早々と会社を退職して、素晴らしい結婚生活が送れるはずであった。しかし、現実には厳しく、滋賀の片田舎で専業主婦の傍ら細々と中学生に英語を教えながら、何とかして籠の中から飛び出せないものだろうかと一人で悶々としていた。市立女子高の1年だけの常勤講師の口が回ってきたのを皮切りに、教職への道を模索し始め、大学院で英語の勉強をやり直すことにした。大学院へ入るための受験勉強をていねいに指導してくださったのが、前川哲郎先生である。ハーディを研究しておられた前川先生に、滋賀大学の研究生として指導を仰ぐことになったのも、偶然、高校の恩師であった先生の近所に住み、先生と親しかった友人の口添えによるものであった。こうした偶然が重なって、私はハーディに出会い、諸先輩から多くのアドバイスを受け、同年輩の研究仲間にも励まされながら、ハーディの論文を書き続けて、現在の大学の専任教員の職を得たのである。

同志社大学に戻ってからは、那須雅吾先生がハーディ研究をされていることを知り、若い友人と一緒に、先生の指導を受けた。先生は1986年に「十九世紀英文学研究会」を発足させてくださった。今では、京都だけではなく遠方からも20名余りの会員が集まって来るこの研究会での毎回の研究発表と議論は得がたい時間である。もう一つ私がお世話になったのは、野谷士先生主宰の「関西英米文学研究会」が毎年発行している『英米文学手帖』である。この同人誌に私の拙いハーディ研究論文を載せて頂いたお陰で、私の研究業績が出来たのである。

ハーディの舞台となる英国南部の風景と、私が生まれ育った田舎の風景とを重ね合わせながら、作品を読んでいたのであるが、どうしても英国の空気を吸い、英国人に接してみたいと思うようになった。英国への憧れが募り、ヒースロー空港に降り立つ夢まで見始めた時、「やっぱり英国に行かねばならない」とジョージ・エリオットを研究している友人と一夏を利用して、皆からアドバイスを受けて綿密な計画を立て、初めて英国を旅した。ハーディの小説の舞台となっているドーセット州とジョージ・エリオットのコヴェントリーや博物館のあるナニートンを中心に、時間と体力の許す限り、精力的に歩き回った。あれから、何回も学生の語学研修の引率で英国に行ったが、1986年に友人と二人で初めて旅した英国の風景と旅先で出会った人々は、私の原風景となって残っている。ドーチェスターの博物館を見学していた時に、ここでハーディの文献研究をしておられた大榎茂行先生の声聞き、異国の地で、偶然、研究会の先輩に出会い、ご馳走してもらった喜びを感謝と共に思い出す。ハーディが生きた時代から100年以上も経ているのに、私にとっては小説の舞台そのものに思えたのである。ハーディ・カントリーを旅してからは、彼の小説が身近に感じられるようになったのは確かである。

1998年から1年間、大学からサバティカルで北ウエールズのバンガーにあるウエールズ大学で研究する機会を与えられた。ウエールズ語の文献では世界一を誇る蔵書数を持つライブラリーであるが、ハーディの専門家がないので、彼の研究書がきわめて少ないのは、残念であった。それでも、ハーディの修士論文を指導している先生が私のアドバイザーになってくださった。ここでは、短編集と一緒に読み、ハーディの6作品をもう一度読み直し、論文を書き、それらに貴重なコメントをもらった。大学内の授業では、英文科の学生やヨーロッパから来た留学生と共に、ジェイン・オースティンのクラスで全作品を読み、ディスカッションをしたことは、最も貴重な経験になり、これ以降、ジェイン・オースティンの作品研究にも手を染め出した。

サバティカルの副産物は、それまでずっとしり込みをしていた「インターナショナル・トマス・ハーディ・カンファレンス&フェスティバル」に参加する勇気を得たことである。1週間ずっと真面目に講演やディスカッションに出席していたわけではないが、町の住民たちを巻き込んでこのプログラムは、楽しかった。著名な研究者が親しく声をかけてくれたり、アメリカの友人が出来たり、聞き取れなかった講演の内容を解説してくれるイギリスの高校の先生がいたり、カンファレンスのスタッフが裏話を聞かせてくれた。

ハーディ研究を始めてから、30年余り、莫大な数の詩、短編、詩劇とまだまだ研究しなければならない宿題を前に、ハーディの難解さと偉大さに圧倒されているのが現在の心境である。

ハーディと私

津田香織

このニューズレターが配布される頃には既に出版されていると思いますが『トマス・ハーディ全集』中の『詩集Ⅰ』の編集を手伝わせていただいたことで、ハーディのおもしろさを再認識し、また他の先生方から多くのことを学ばせていただきました。

「ハーディ」との最初の出会いは小学生の時ではないかと推測しています。家の本棚にあった*Tess of the d'Urbervilles*の三巻本の翻訳を一冊が薄いので読みやすいだろうと手に取ったのですが、日本語も内容も難解であり理解できなかった記憶があります。しかしながら、大学院の授業で*The Mayor of Casterbridge*が取り上げられた時に、妻を売る場面からこの小説を以前に読んだ事があることに気づき、また別の機会に*Far from the Madding Crowd*を読んでいて羊が崖から墜落するシーンをビデオで観た記憶が甦ったので、結局のところどの作品が最初かはっきりしません。ことによると短編かもしれませんが、あるいは作品ではなく何かハーディに関連する場所だったかもしれません。書いていて思ったのですが、これは「出会い」というより「再会」の物語のようです。

トマス・ハーディという作家の名前をはっきり意識したのは、大学院受験のために勉強していた時だと思います。学部専攻が英文学ではなかったため、一年と決めた大学院受験準備期間中に、英文学史・英語学・フランス語を一から勉強しながら英語を勉強し直し、さらに卒業論文に代わる論文を書かなければなりませんでしたが、この論文にあまり時間をかけられず、読んだことがある作家の中から、もっと文学的な理由だと良かったのですが、長寿の作家の方が書くこともいろいろあるだろうという理由でハーディを選択しました。このようなわけで原書で最初に読んだ長編小説が*Tess of the d'Urbervilles*なのですが、翻訳本のテスと原書のTessという「二人」の女性から受ける印象の違いが興味深く、私に原書で読む楽しさを教えてくれた作品となりました。

次に印象に残っているハーディとの再会の場は、アフリカの小説です。ポストコロニアリズムに興味をもち、ハーディの時代にイギリスと関係が深かったアフリカ、インドについて勉強しようと考えました。ロンドン大学で、スーダンの作家Tayeb Salihの*Season of Migration to the North*の英訳を読んでいてハーディが出てきたときには意外な場所で知り合いに再会したような気がしました。この小説の語り手はイギリス留学から故郷の村に戻った男性で、彼は数年前にその村に移り住んできたという男Mustafaに出会います。Mustafaはイギリスで暮らした過去を隠しているのですが、語り手に自分の過去を一部だけ話した後、彼を息子たちの後継人に指名して（おそらく）ナイル川で溺死します。語り手は、託された鍵でMustafa本人以外誰も入ったことがないレンガ造りの部屋に入り、香や白檀の残り香が漂うその部屋にイギリス風暖炉と英語の本でうめ尽くされた本棚を発見して驚くのですが、その本の中にハーディが含まれています。ここでハーディはヨーロッパ的なもの、イギリス的なものという意味をもつのでしょうか、Tayeb Salihがハーディのように架空の村を舞台にした作品を書いていることも無関係ではないでしょう。北岸（イギリス）にも南岸（スーダン）にも行けずナイル川の真ん中で溺れる語り手やMustafaと、日本人の自分自身を重ね合わせるのは

時代的にも状況からいっても無理がありますが、隠された過去あるいはMustafaの一部として描かれた彼の本棚と自分の本棚の中身が似ているのが奇妙な感じでした。自分が英文学・ハーディを研究していることをごく普通のことと捉えていましたが、その選択には歴史的・文化的・個人的意味があるようです。

最新のハーディとの再会は、前述の詩集の編集です。詩の読書会メンバーに加えていただき何年にもわたり数編ずつ読んでいった詩をこの機会にまとめて読み直してみ、そこに表現された悲観的考え方に今さらながら驚きましたが、同時にハーディに対する興味を新たにしました。*War Poems*と題された南アフリカ戦争を扱っている一連の詩を論じてみたいと考えていますが、文学作品が作者の自伝的要素を含むとすれば論文にも書き手自身が表現されているはずであり、私がハーディについて書く論文が「ハーディと私」なのかもしれません。

授業におけるハーディの詩

西村美保

私が勤務している大学は教員養成系で、かつ、私のポストは文化論を教えるポストなので、ハーディの原作を、特に小説を本格的に授業で扱う機会はほとんどない。しかし、ハーディの詩は、専門の授業や一般英語の授業で紹介することがある。今回は授業においてハーディの詩をどのように取り上げているかについて、また、今後の課題について紹介させていただこうと思う。

それは大きく分けると3種類で、ひとつは季節に合わせた、歳時記的な取り上げ方、2つめはヴィクトリア朝の精神文化との絡みで、信仰の揺らぎについて論じる際に、3つめは、名句として扱うというものだが、実はこれはまだ今後の課題で、ハーディの引用はこれからである。ひとつめの取り上げ方は一般英語で行ったことがあるが、私のお気に入りには秋に、“Autumn in King’s Hintock Park”を読むことだ。ちなみに、クリスマス近くに、テニソンの*In Memoriam*の中の“Ring out, wild bells...”で始まる詩を読む。2つめの取り上げ方は、専門科目のゼミや免許更新講習でも行った。ヴィクトリア朝における信仰の揺らぎを反映するようなテニソンやアーノルドの詩を読み、最後にハーディの懐疑的雰囲気のある詩を読むという流れであるが、難解なヴィクトリア朝の詩を一から読むのは大変で、気の毒でもあり、時間の関係もあるので、長い詩は訳を先渡しして、脚韻を踏むことをヒントに穴埋めする作業を行ってもらい、気楽にボキャブラリーのゲームやクイズのような感覚で詩に親しんでもらうようにしている。また、内容についての簡単な質問を作っておくと、考えるきっかけになるようだ。3つめについては、まだハーディの作品からは引用していないのだが、ジョンソン博士やシェイクスピアから、デザイナーや画家まで広範囲に名句を取り上げている。ハーディの詩や小説もその宝庫だと思う。ハンドアウトには訳を書き、それを参照に原文の穴埋めをさせることで一応英語の演習になっている。そして、覚えるために名句の英文を2回ほど書く欄を設けた。一般英語の授業のイントロダクションとして行っている。この名句の紹介をするようになったのには2つのきっかけがあって、以下、

それについて書くが、どちらも書籍に関係している。

私のお気に入りの本のひとつに、*Simple Abundance: A Daybook of Comfort and Joy* (Sarah Ban Breathnach, New York: Warner Books, 1995) という本があり、翻訳『シンプルな豊かさ』も早川書房から出ている。実は翻訳の方に先に出会い、気に入って後から原書を取り寄せた。この本に出会ったのは、私が歳時記の本あるいは名句集のようなものを探している時で、偶然、これ以上ないくらい希望に合う本に出会えて、幸運に思ったものだが、帰宅してから「まえがき」を読んで驚いた。私の研究している領域と重なるテーマについてこの著者が本を書いていると分かったからだ。

数年前、19世紀の家庭生活の長所に関する書物を2冊出したあと、わたしはヴィクトリア朝時代の室内装飾について本を書くつもりでした。ところがひだ飾りや華やかな装飾について1年間考え抜かなければならないと思うと、わたしの心はひるみました。わたしが本当に書きたいのは、靈的、創造的で真正なものへの深い憧れと・・・扱いかねるほどの大きな、葛藤を伴う責任とを、どううまく調和させるべきかを教えてくれるような本でした。

この本は365日の毎日について、テーマが書かれ、著者のエッセイがあり、それを象徴するような名句が引用されている。どちらかというとな女性向の本だと思う。内容もさることながら、私が特に興味したのは、この著者が非常に的確な名句を収集していることで、引用文の出典が多岐にわたっていることだ。参考文献のまえがきとして、本人が書いているのによると、20年以上も前から彼女は「簡潔で深遠な言葉の収集を楽しい趣味のひとつにしていました。書物、雑誌の記事、評論、新聞の特別記事、ラジオの対話、テレビ番組、演劇、映画などさまざまなところからわたしは名言を集めます」ということである。何て知的な趣味なのだろうと感心し、これも読書の大きな意義と目的のひとつだと痛感し、私も真似ようとその時は思ったが、普段は忘れてしまう。意識的に集めるために、大学の授業で名句をとりあげるようになった。

もうひとつのきっかけは、ある時、日本の某女性雑誌の表紙にテニソンの名句“'Tis better to have loved and lost than never to have loved at all.” が載っていたことだった。この言葉がテニソンの*In Memoriam*,セクションXXVIIからの引用であるといった情報までは掲載されてなかったと思うが、ファッションや恋愛の記事を載せた日本の女性雑誌の表紙に載るとは、つくづく、言葉というものは語り継がれると、作品から独立して広まっていくものだと思った。しかし、それもよいのかもしれない。授業で学生にとって、読みやすい英文のエッセイを読んでも、後で一文も憶えていないということなら、淋しいことであるし、心に沁み入る暗記するに値する名句を紹介するのもいいかもしれないと思ったのだ。新学期に向け、そろそろ準備する時期になったが、私の名句のコレクションは進展がない。きっと授業が迫って、ばたばたといろいろな本にあたることになるのだが、ハーディの詩からも引用することになるだろう。

第53回大会印象記

山内政樹

日本ハーディ協会第53回大会は、風間末起子氏のお世話により、2010年10月30日(土)、京都の同志社女子大学今出川キャンパスにおいて開催された。まず、同大学の学長加賀裕郎氏が開会の挨拶を述べられた後、午前の部の4名の発表者による研究発表が行われた。

最初に、金谷益道氏の司会で、清宮協子氏と柴田聡子氏の研究発表が行われた。清宮氏は『『ダーバヴィル家のテス』への当時の批評』と題して、『テス』が出版された直後の批評に焦点を当て、その当時の批評がより深く作品の価値を知る一助となることを考察された。まず、当時の批評を、テスの破滅はテス個人の責任であるという道徳的観念に立つグループと、階級や性差による差別が原因となって破滅させられた社会の被害者としてテスを捉えるグループに分類・比較し、いずれのグループもテスの心理的葛藤を丁寧には扱っていないと指摘された。当時の批評家が見逃したのは、支配的であった結果のみを問題にするという意味での功利主義的倫理観に原因があり、その後のテスの倫理的批評は、この倫理観への批判の上に構築されたのではないかと示唆された。

次に、柴田氏の『『森林地の人々』におけるグレイスの情熱』と題する発表では、グレイス・メルバリーが作品を通していかに首尾一貫して躍動的な生き方をしてきたかを、グレイスの視点から論じられた。ハーディのほかの作品のヒロインと比較しながら、グレイスの情熱について論じられ、彼女の情熱、つまり、希望や歓喜から湧き上がる本能、激しく燃え立つ感情、生(性)への活力の源や官能的な要素に見られるグレイスの情熱の発露が、困難を乗り越えて、前進しようとする力を生み出し、夫であるフィッツピアーズを改心させ、再び結ばれることを可能にした、と締めくくられた。

午前の部の後半は、栗野修司氏が司会を務め、西村美保氏と渡千鶴子氏が発表が行われた。まず、西村氏の『『エセルバータの手』における使用人の表象』では、ヴィクトリア朝の使用人の実態との差異を比較・検討され、ハーディが『エセルバータの手』で描く使用人の表象を論じられた。西村氏は、ヴィクトリア朝の使用人は主人の私生活を知っている潜在的脅威の存在であり、通常は黙従する不可視の存在でしかないが、ハーディは支配階級の悩みの種である使用人問題を顕在化させ、潜在的な使用人に対する恐れを具現化させている、と指摘され、『エセルバータの手』は支配者階級の読者にとっては、コミカルでありながらも、使用人問題や使用人による支配者階級世界の転覆、支配など重層的に脅かされるような内容になっていると結ばれた。

渡千鶴子氏は「ハーディ像に迫る—詩集の観点から—」と題して、読者が統一だった調和と一貫性を求める詩集において、ハーディの読みの多様性に重点を置いて論を展開された。まず、“An August Midnight”では、詩全体を身体的な感性に基づく表現である感覚表現に置き換えて読み、人間と昆虫を同じ舞台上に上げるハーディの視点の多様性を説き、“Panthera”では、正式な結婚を望まずに純粋に子供を求めた語り手、結婚したくてもそれを望めないパンシラ、自分のためでなく女性とその子供のために結婚し、育てる老いた男性という3人の典型的でない男性を描いて、ハーディは当時の男性像への反感を描いた、と論じられた。4篇の詩を取り上げ、当時の

conventionにとらわれないハーディの多様性を読み解かれた。

昼食時間を挟み、永松京子氏の司会による総会が行われ、続けて上原早苗氏の「第19回国際トマス・ハーディ・コンフェランスに参加して」の報告が行われた。その後、シンポジウム、特別講演という午後の部が始められた。

まず、シンポジウム「ハーディとカントリーハウスの伝統」が、司会兼講師の金子幸男氏、坂田薫子氏、永富友海氏、田中雅子氏の4氏によって行われた。まず、金子氏がシンポジウムのイントロとして、カントリーハウスがハーディ文学の表象の中で、どのようにイギリスのidentityを規定するものとなっているのかという問題提起を行った後、カントリーハウスをめぐる社会的、文化的状況についての概略を述べられ、それぞれの発表へと移った。

最初に、坂田氏が「オースティンとカントリーハウスの伝統」と題して、発表を始められた。オースティン小説では、ヒロインの危機は男性の指導力のなさ、男性がカントリーハウスを治められるかどうかに関わり、男性の住む邸宅は持ち主の人物像を、あるいは伝統的、保守的イギリスの優れた性質、価値観を体現する場所となっており、邸宅の描写によって、オースティンの考えるイギリスという国家の理想的姿が読者に提示されていると指摘された。しかしオースティンの後期作では、男性と邸宅が体現する理想像は崩れ始めていると指摘され、共同体を形成する理想の支配体系がイギリスという国家の政治的理想像を体現していたカントリーハウスは、今や植民地や奴隷への圧制によって運営されているという事実によって、カントリーハウスでの田園世界への見解が揺らぎ始めていると論じられた。

次に永富氏の「ハーディとカントリーハウスの伝統」で、結婚と家族とは他者である女性を取り入れることで成立する制度であるが、センセーションノベルではその他者性を前景化することで物語を展開させると指摘され、センセーションノベルはその他者性の強調である私生児、犯罪者、狂女を登場させることで「家庭＝女性」という神話をグロテスクに壊すと論じられた。また、女性と女性が侵入する家とは密接な関係があり、私生児であればsexualityの巣窟に、狂女であれば精神病院にと女性の他者性に応じて家・屋敷が自在に変更されると論じられた。

次に金子氏が「イングリッシュネスと階級—『エセルバータの手』と『微温の人』のカントリーハウス」と題して、地所HarefieldとLychworth Courtを中心に、カントリーハウスの正当な住人とは何かを考えることでEnglishnessがどのように変化したかを論じられた。Lychworth Courtという腐敗したカントリーハウスが生き延びるにはエセルバータという労働者階級の血を混ぜ、しかもmasculineな女性が舵取りをしなければならず、Englishnessは貴族と上層中産階級から生まれるのではなく、貴族と熟練労働者階級の結合にあると論じられた。次に、『微温の人』では、Stancy城の住人の交代の意味、最後の焼失の意味を問うことで、理想的なEnglishnessにどのような変化が生じたのかについて論証された。

最後に田中氏が「『ハワーズ・エンド』における中産階級のカントリーハウス」と題して、イギリスの階級制度における貧富の問題、農業不況や宅地開発、自然破壊など当時の社会状況を踏まえた上で、『ハワーズ・エンド』を読み解かれ、田中氏は、この小説はイギリスの状況を扱ったThe condition of England novelであり、イギリスの運命についての小説であるとし、ハワーズ・エンドの屋敷がブリテン島そのものを象徴し、イギリスを受け継ぐのは誰かという問題提起をされ、イギリスの次の担い手は農

村社会や共同体とのつながりが強い独立自営農（yeoman）であると論じられた。

プログラムの最後は、大榎茂行氏の司会で、深澤俊氏による特別講演「エグドン・ヒースふたたび」が、ハーディの『帰郷』に感激したGustav Holst作曲の『Egdon Heath』の音楽が流れる中、始まった。深澤氏は農村世界にある豊穡のイメージとパリのような近代的側面を併せ持つエグドン、その世界を創造した観察者・記録者としてのハーディを紹介された後、神秘、孤独と悲しみを体現する夜のエグドンと悲劇を治癒して健康を取り戻す昼のエグドンの2面性を論じられた。また、gentlemanを理想としたイギリスの伝統的な感覚の中に、クリムの夢は位置づけられ、エグドンの仲間をその上昇志向に乗せなければならない意識、人間だけでなく生物にも優劣がないという感覚はクリムとハーディ共通の感覚であると指摘された。音楽、絵画、宗教など多岐にわたる観点からエグドン・ヒースを論じられ、さまざまなヒントを与えていただいた。

玉井会長の閉会の辞でもって大会が終了した後、ボンボン・カフェに場を移して懇親会が和やかな雰囲気の中行われた。今年も例年通り大変充実した学会となったのも、同志社女子大学と協会事務局の皆様の支えがあればこそと、心より謝意を表する次第である。

《事務局よりのお知らせ》

会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、年間費は4,000円です（学生・大学院生は年1,000円です）。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいています。とくに、役員の方は、ご協力いただけると幸いです。なお、顧問の先生は、一般会費のお支払いは不要です。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120-5-95275です。会費は、郵便局からお振込みください。同封の振替用紙をご利用の場合は、手数料をお支払いいただく必要はありません。

次回大会について（研究発表募集）

次回第54回大会は、今年の10月29日（土）に、中央大学（東京都八王子市、多摩キャンパス）で開催されます。研究発表にご応募の方は6月30日までに、800字程度のレジュメにご自身の略歴と連絡先（メール・アドレスもお知らせください）を添えて、協会事務局までお申し込みください。前回より、申し込みの締め切りが変わっておりますので、ご注意ください。発表時間は25分で、ほかに5分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会では特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演は森松健介先生（中央大学名誉教授）がお引き受け下さいました。シンポジウムは、金谷益道先生（同志社大学）が中心になってハーディ小説の今日的意味を問い直す企画を検討中

ですので、その詳細は次号の協会ニュースでお知らせいたします。特別講演とシンポジウムでは大変魅力的なお話がうかがえるものと存じます。会員の皆さんとともに楽しみにしてお待ちいたしたいと存じます。

《内外ニュース》

会員による研究書・翻訳書：

井出弘之著 『ハーディ文学は何処から来たか—伝承バラッド、英国性、そして笑い』
(音羽書房鶴見書店、2009年10月)

福岡忠雄監修 北脇徳子・渡千鶴子・風間末起子・杉村醇子編著
「『カスターブリッジの町長』についての11章」(英宝社、2010年11月)

内田能嗣・押本年眞・森松健介 他訳 第15-1巻

『詩集I』(大阪教育図書、2011年2月)

高桑美子訳 第12巻 『ダーバヴィル家のテス』(大阪教育図書、2011年2月)

福岡忠雄著 『読み直すトマス・ハーディ』(松籟社、2011年2月)

ハーディに関する講演会：

2011年1月22日(土)に関西大学で、黒野豊氏による「よもやま話——夢の世界とハーディ」があった。

“Hardy at Yale II”：

2011年6月9日—12日に、イエール大学にて開催される。

編集後記

3月11日午後2時46分頃、M9.0という国内観測史上最大の地震があった。地下の断層の破壊は、青森県沖から茨城県沖までの長さおよそ500キロ、幅およそ200キロに及び、長野県北部の地震は、この地震波の誘発に当たるらしい。東京では数万の帰宅難民が出た。この巨大地震によって、皆が天変地異の脅威に打ち震えた。被災された方に思いを寄せ、各地の爪痕が少しでも小さいことを心よりお祈りするばかりである。

さて、浅田雅明氏から編集作業を引き継ぎました渡千鶴子です。至らぬ点が多々あるかと思いますが、どうか会員の皆様よろしくご指導、ご協力の程お願い致します。昨秋と今春に著書を上梓されました福岡忠雄氏や、長年にわたりハーディ協会の運営委員としてご尽力頂きました森松健介氏をはじめ、玉稿をお寄せくださいました方々に感謝致します。前任者から「新企画があればいいですね」とアドバイスを受け、「ハーディと私 その後」を設けました。比較的若い方の執筆である「ハーディと私」(執筆のなかった号もあります)に因んでいます。大学では、「研究者である前に教育者であれ」と言われております昨今、授業風景に関する内容も頂戴して、バラエティに富む69号となりました。中央大学生協(印刷)の藤様にはいろいろお世話になり有難うございました。

次号は9月発行の予定です。原稿の締切日は7月10日で、論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度です。皆様奮って原稿をお寄せください。併せて巻頭写真も募集しています。ハーディに関する著書、翻訳などもございましたら、編集者までご連絡ください。尚、ホームページ(<http://www.justmystage.com/home/blueeyes/>)も一度クリックしてみてください。